



ウォームハートに クールヘッド

日本放送協会 解説主幹
山田伸二

私が日銀の記者クラブに在籍したのは、プラザ合意の翌年1986年1月から87年8月までの短い時間でしたが、日本経済が円安を前提としていた経済から円高を前提にする経済に移る大激動期で、本当にいっぱい勉強させていただきました。日銀の方にはこの前後にも沢山お世話になりましたが、今日は有吉慶三さんについてお話しします。

有吉さんは昭和25年に入行し、昭和56年に統計局長でお辞めになりました。私が初めてお会いしたのは、入社して3年目の昭和51年1976年の事です。有吉さんは当時金沢の支店長で、私は経済担当という事から頻繁にお邪魔するようになりました。当時私は独身、本当は有吉さんをだしにして秘書の女性に会うのが目的でした。彼女は私が金沢でお会いした女性の中で、一番綺麗で一番心優しい人でした。お世話になったこと、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

さて、有吉さんからは大切なことをいっぱい教わりました。当時、アメリカはカーター大統領の頃でイランで大使館が占拠されるなど、政治経済とも権威が失墜してドル

安円高が進んでいました。この頃有吉さんは金沢市役所の幹部の研修会で講演しました。「皆さんは円高で戦々恐々とされていますが、円高は悪いことばかりではなくこれから段々メリットが出てくるから冷静に事態を見て下さい」と呼びかけました。北陸は化合織のメッカで安い輸入品におされて青息吐息、円高恐怖症に覆い尽くされていました。しかし、この話はとても説得的だったので私はニュースとして原稿にしました。

「円高は悪くない」、その後の動きを見れば有吉さんの言われたとおりでした。これが私の中にしっかり刷り込まれて、プラザ合意の後の円高でも、世間の円高恐怖論と距離を置いて対応することが出来ました。俗説、通説に惑わされず、事態を冷静に見つめる「クールヘッド」の大切さを教えて貰ったというわけです。

端正なマスクでスポーツマン、いつも冷静で本当に魅力的な有吉さんでしたが、正義感の塊だった有吉さんが、一度心から怒った事がありました。金沢の地場の繊維商社が行き詰まった時で、経営者

が一向に責任をとろうとしないことに対して、「従業員や取引先に迷惑をかけているのに無責任だ」と、部外者の私にも湯気を立てて本当に怒っていました。仕事というのは全身全霊を込めてするもの、この時には「ウォームハート」の有吉さんをみたものです。

「ウォームハート・クールヘッド」は有名な経済学者マーシャルの言葉ですが、有吉さんはその神髄を自らの生き方を通して私に教えてくれました。その有吉さんは、日銀を離れた後バブル崩壊後に経営が傾いた地方銀行の頭取に就任され、孤軍奮闘の活躍をされましたが、残念なことに志半ばで難病にかかり、そのまま不帰の人になりました。私の周りには銀行の経営破綻の責任をとって自殺した同級生もいました。経済の運営を誤ると、人々の運命をこんなに変えてしまうのかと心が痛むばかりです。日銀は経済運営に重い責任を負っていますが、私も経済ジャーナリストの端くれとして、バブルに向かわせた誤りを糾すことが出来なかった責任について、ただただ猛省するばかりです。